

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

糞転がしをめぐる土着の知識：  
梅棹が調査できなかったもの

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 周, 太平 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00005981">https://doi.org/10.15021/00005981</a>

## 糞転がしをめぐる土着の知識

— 梅棹が調査できなかったもの

ウルゲディ・タイブン

内モンゴル大学

- |                |                |
|----------------|----------------|
| 1 はじめに         | 4 糞転がしをめぐる生態循環 |
| 2 現地からの「科学的」議論 | 5 おわりに         |
| 3 パーサンバンブについて  |                |

### 1 はじめに

糞虫の種類によって、その糞の消費の型式には二型ある。

1, Scarabaeidae の如く、ころがして巣にはこびこみ、後、それを食するもの。

2, Splendens の如く、その場で消費してしまうもの、糞そのものに穿孔する。……。

もし、糞が牧草の肥料になるものとしたら、果たしてどの家畜の糞がもっとも有効であろうか。

質的、および量的の二方向にわたって考えよ。そして、糞虫がそれを横取りしているものとすれば、はたしてどの程度のものであろうか。

梅棹忠夫フィールド・ノート（整理番号：Fold002, No.53-55）より

いまから5年前、わたしは、ファーブルの『昆虫記』を愛読した。その本のなかに、わたしの少年時代なじみが厚いパーサンバンブを思わせる「糞ころがし」や詩情あふれる牧野の生態が書かれているからである。わたしは、ある種のノスタルジアをおぼえ、35年ぶりに故郷へ帰り、何とかそのパーサンバンブに出会いたいと願った。故郷は大興安嶺の山麓にあるジャライト旗バヤンウラン・ソム、満州国期の興安南省ジャライト北部の第一ノトクである。しかし、残念ながらその願は実現できなかった。パーサンバンブは見つからない。ありのままに生きていた自然は味気ない風景に変わり、わたしの少年時代に住んでいた静かな村落はもう中国式の小さい街になってしまった。パーサンバンブについて、村人に聞いてまわると、実際に糞を転がしているその生態を見た人は甚だまれなのである。絶滅しているかと思ひ、この辺りで糞を転がしているバンブを見たことがないかと、ある年寄りに聞いてみた。すると、「もう生まれ変わりだ、みんな人間に変わり生まれているからさあ」というなんと不思議な答えであった。たしかに、昔のかぐわしい花や柔らかない牧草が生えた丘や野原は、もうすっかり消えてしまい、あ

っちこっちバイシンが建てられて、人だけはどこへ行ってもやたらに多い。

今回、バーサンバンプの働いている現場を見ることができなかったけれども、むかしの記憶を起こしながら、バーサンバンプについて何かを書きたいと思い、それに関してどんな生資料があるかと調べているうちに、冒頭に述べた梅棹忠夫フィールド・ノートにある記録に気づいたのである。それは、梅棹がモンゴル草原の生態学研究について残した野外調査などの学術的情報である。しかし、季節の関係でもあろうか、自らもっと詳しい観察ができなかったせいでもあろうか、梅棹には草原と深い関係があった昆虫についてのフィールド・ワーク研究としては、わずかに断片的記録しかない。梅棹のフィールド・ノートには糞転がしの研究をしたがっていたようなメモがみられるが、残念ながらじっさいに調査できていない。ところが、糞転がしの存在とそれをステップという生態のなかに関連づけて指摘したことが大切であると思う。

後述する後藤十三雄、米内山庸夫、山崎武雄の研究にたいしても、梅棹は多くの疑問をいただいたことが、「内モンゴル遊牧民の牧野経営」という論説からもうかがえるのである。多くの疑問に遭遇することにより、大きな問題を導き、結果的にその研究対象を新しい視点で見ることができるようになる。それは、梅棹的思考方法の支柱とも言えるかもしれない。

## 2 現地からの「科学的」議論

20世紀前半期に、日本人研究者がモンゴル草原についての種々の記録を残していることは、ご承知と思う。それに、生態学的に遊牧社会を考え、実態解決に着手したのもとして、今西、後藤、米内山、梅棹の現地調査による業績が代表的である。米内山庸夫は『蒙古草原』という著作のなかで、「三位一体説」を発表した。三位一体とは、モンゴル草原の生活は人間と家畜と草原との三位一体の生活であり、「家畜第一、蒙古人の生活第二である。蒙古人は相会えば互に先ず家畜はどうか、草がいいかどうかと挨拶する。日本人は相会えば先ずお早う、いい天気ですなといい、支那人は先ず飯を食ったかという。日本人にとっては朝の晴朗が第一であり、支那人にとっては天気より先ず食うことが第一である。蒙古人にとっては何ものよりも先ず家畜である。……人間が家畜に依り家畜が草原に頼りそうして草原は人間に依って栄える。即ち、蒙古草原に於ける人間の生活はその衣食住一切の資料を家畜に仰ぎ、その家畜は草原の草に依って生き、草原はその草原を大事にし、それを耕やすことを許容しない蒙古人に依って保たれ栄えているのである。蒙古草原に於けるこの三者の関係はその大自然の環境とそこに住む人間の生活とを睨み合わせて自然に発達して来たもので、その一つをかいても草原の生活は破れる。その草原の生活が破れては蒙古民族の発展も家畜の繁栄もないのである。」(米内山 1942: 107-108) と述べている。こうした相互依頼の生態系が成り立ち、その三つのうちのど

れか一つが欠けると系統的バランスが崩れると考えていた。それは、1942年当初の、原発想である。

この問題について到達した結論として、まず、西島捷三の「蒙古草原」という論考について理解する必要があると思う。西島によれば「蒙古人は馬上徒に遊行して、生産の組織及技術に関し何等の知識なきが如く喧伝せられるが、蒙古人は生来より草原経営の組織と技術とを習得し、日本農民が水田経営の能力を有するが如く、蒙古人は草原経営の能力を有する。」(西島 1940:108)という。この点については、米内山の「蒙古草原は、まったく蒙古人によって保たれる。」という見解も西島説に賛成している。後藤も、「草洋は、決して千古自然のまま放置された未開の荒野ではない。私は奥地を旅行して、本当にまったく人の手の入らない自然の景観というものが、求むるに意外に少ないことを、つくづく考えさせられた。それは、耕地や樹林と同じく、草洋の牧民が数百年にわたって経営した牧野なのである。」(後藤 1942:64)とし、「我々農業社会に属するものは草原を見れば未開の荒野であると思ひ、蒙古人の遊牧技術なり牧野に対する心使いを卒然と看過しやすいが、彼らが牧野保全のためにいかに細心の注意を払うかは、我々が迷信を喰う些細な慣習のうちにもそれと認められるのである。」(後藤 1942:72)と述べている。じつは、これらの、モンゴルにおける牧野経営の技術の存在を主張している見解には、遊牧民の適応性が観察されていた。人々が遺伝的に文化的に自分たちの環境に適応するために、長年の経験と知恵を蓄積してきた。それは、これまであった知的能力という意味で、土着の知識、または在来知ということができる。

後藤の見解に対して、梅棹は「草原のこまかなちがいに對する詳細な知識をもって、それぞれ家畜の必要に応じて、その草原の適当なところをえらんで放牧しても、それによって恩恵をうけるのは家畜ばかりであって、それが草原の保全のためによいということには、すこしもならないではないか。それは草原の合理的利用にはちがいないとしても、それは家畜の立場での合理性であって、草原の立場での合理性とはいえない。それは、あるいは家畜飼養上の技術ではありえても、牧野経営上の技術とは別ものである。こんなことは、モンゴルの草原が、牧民の技術的経営の結果である、ということの根拠にはならないではないか。」(梅棹 1990:398)と述べている。梅棹の思考が、問題を分割して一つ一つに解決しようとする方向にいったため、全体にたいする見通しを欠いていたと感じられる。つながっているものを、バラバラに見るだけで結論的意見や疑問をだされるのは、理解しがたい。

そして、モンゴルにおける土地利用の合理性について、また、家畜の糞とも関連して、つぎのような考察がある。

「蒙古の家畜は幾百頭幾千頭となく群をなしてしづしづと草を食いながら草原に行く。羊などときに三千、五千という大群をなし、列をなして横に並び互に体をすり寄せ静かに草を食いながら進んで行く。その通り過ぎた跡を見ると草は恰もバリカンで刈られた如

くきれいに食われ、あと青畳の如く美しく、ただところどころに、羊の食わないヒロハタカトウダイなどの毒草が残り立っているのみである。こう食われることは、一種の刈り込みであり、枝葉のむやみに繁茂するのを抑制し草の根を充分強く張らせ結局は草原の草を強靱にするのである。これに加えるに、食いながら進み行く間にその大群の家畜の落す糞はまた草の肥料ともなる。そうして、蒙古の家畜は広い草原をづぎづぎと草を食いながら進み、一カ所の草を幾度も食い荒らすことをしない。」(米内山 1943 : 253)。

ところが、各々の考え方のちがいがあって、西島捷三は「蒙古は高度に乾燥した高原なるが故に、草原の上に放置せられた家畜糞は、日本内地のように、腐熟して土地に浸透することなく、したがって、肥料源となり得ないのみならず、乾塊として永く地上にとどまる故に、該地に日光遮断せられて、草生を見ざるにいたるものである。すなわち、家畜糞を採集するにあらざれば、牧野面積確保上、まことに由々しき重大問題を惹起する。蒙古において、燃料として家畜糞を採集する慣習は、実に天理に適應する方策である。」(西島 1940 : 110) と、家畜糞の採集による牧野確保=経営技術の存在を主張している。しかし、山崎武雄は、家畜を通して肥料源として土壤に還元され初めて地力が維持増進されるのだが、牧民のいとなみが牧野に対して悪結果をおよぼしているので、畜糞は採集を禁止して、肥料として牧野に還元すべきである(山崎 1943 : 252)、と考えている。

これらの意見を列挙しながら、梅棹は米内山の説明にたいして「いま、米内山は、家畜の糞が肥料として有効にはたらくことをのべていた。そのことも、それがたとえ事実としても、それは家畜が勝手に糞をして、草が勝手にそれを吸収するのだから、なにも牧民の技術のかかわりしったことではない。」(梅棹 1990 : 399) と、反論している。このように、研究者たちのあいだに意見が分かれていたが、いずれにせよ、家畜の糞や牧野草生の研究では、草原の昆虫や植物など生物群集にももつづき、生態系の相互作用の仕組みはもちろん、各要素の存在そのものも、あまり取りあげられてはいない。換言すれば、土着のものとあまりかけ離れたら、たんなる「科学的」論争になってしまうので、やはり、全体論的な理解という点で、知られていない他種のものについても把握しなければならぬ。

### 3 バーサンバンプについて

モンゴルの草原には、家畜の糞が肥料として効力をもっているかいなかについて、やはり、対象の観察が困難であったようだ。そういう場合には、「科学的」知識とは異なる情報を得ようとせずにはいけない。じつは、そういう科学とは異なる説明も、科学と背反するものではないという理念をわたしは主張したい。たとえば、畜糞と牧野との関係を考える場合、昔から草原で人間と深いかわりがあった土壤動物などについて、こま

かい検討をくわえてゆく必要がある。じっさいからみると、大群の家畜の落す糞は、センチコガネのようにみえるバーサンバンブなどの土壤動物に分解されて肥料になることができる。カブトムシのメスにも似ているセンチコガネは、モンゴルで「バーサンバンブ」(BagasunBambuu = Баасан Бамбуу) という。

バーサンバンブ (フンチュウ)、英名では dung - beetles で、学名は *Geotrupes laevistriatus* Motsch と記し、甲虫目 (鞘翅目) コガネムシ *Mimela splendens* 科のうち、哺乳類の糞を食物とするグループに属する類であり、タマオシコガネの仲間であり (図1 参照)、南ヨーロッパ、北アフリカ、中央アジア、モンゴル高原、満州平原などに分布する。体は卵形で、黒色が普通であるが、紫黒色のものもある。体長14-20mm ぐらい、背面に光沢があり、空を飛ぶが、飛行中に急カーブができない。バンブには三種が見られる。まず、体長により二つ分けて、大きいほうがウフル・チョク (Ukher Coku = Үхэр Цох) といい、背面の光沢が強く、真っ黒い、ふだんは単独で活動する。体の小さいほうが通常バーサンバンブという最も数が多く、よく見られる一種であり、炭黒色で、背面の光沢が強くない、群集性が高く、むらがって活動する (特古斯巴雅爾 2011 : 4)。生活力はほかの二種より旺盛なようで、足が取れてしまっても、がまん強く働きつづける。もう一つは、アルタンバンブ (Altan Bambuu = Алтан Бамбуу) という種で、数が少なく、黒色に白い斑点があり、空を飛ぶのが著しい特徴である。アルタンバンブは、モンゴルの子供たちの遊び相手でもあり、『アルタンバンブのうた』はよく知られる童謡で、これをう

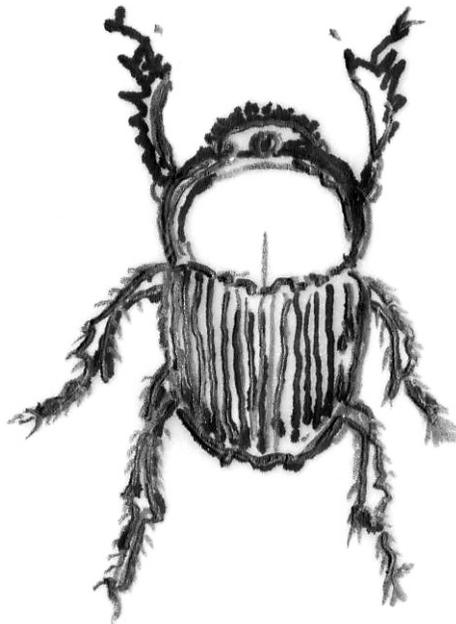


図1 タマオシコガネ BagasunBambuu (バーサンバンブ)

たってあげたら、アルタンバンプも鳴き始める。その自然のなきごえが非常になつかしい。そういえば、『アルタンバンプのうた』の詞やリズムが野口雨情の『黄金虫（コガネムシ）』とよく似ている。このように、これらのバンプは、モンゴルの童謡や童話の世界にもとり入れられ、親しまれている。

バーサンバンプは、内モンゴルの東部に多産し、とくに山野に多い。子供の頃、夏のページェントは、バンプのタマオシであった。いつも、バーサンバンプの跡を追って遊んでいた。かれらが平気で糞球を転がしているか、穴を掘っている、その現場を、わたしはよく見た。じつに、ずいぶん働きもので、牧野から牛柵の中や家の近くまで来集して働く。糞に対する嗅覚はなかなか敏感で、新鮮な糞の臭いをかぐとすぐ飛来する。急いで駆けつけて来たバーサンバンプたちはすぐさま糞球作りを始める。まず糞の山を歩き回り、切り取ろうと決めた場所に器用に頭をこじ入れ、やや多くのおおまかな塊りを切りとる。こまかくきだをついた頭は糞を切り取るナイフである。そして、その塊りを前後に動かして丸める。糞の塊りがだいたい球形になると、いよいよタマオシが始まる。すると、みるみるうちに細かい砂がついて表面が適当に乾き、完全な球体になっていく（図2参照）。それを押し転がして、地下に運び土中に埋め込み、メスは糞球の中に卵を産みつける。埋めこまれた糞球は、幼虫の食糧になる。

糞虫が動物の糞をうまく利用して生きていることについては、塚本珪一の研究によれば、動物の糞はフン虫の搬出、食べることなどの行動によってほどかれ、分解しやすくなるし、植物に吸収されやすくなる。糞の下に坑道を作り、糞を持ち込むことにより、空気を土中に送り込むことになるから作物や牧草の生育に非常に益をもたらす。また、いろいろな実験で確かめられているが、フン虫の行動はハエなどの双翅目昆虫の発生を抑制することになり、家畜の寄生バエの駆除にも役立っている。そこで、フン虫（コガネムシ主科）の働きについて、つぎの4点にまとめている。①放牧家畜などの糞を分解、地中へ持ち込むことによって放牧地を改良、肥料化し清浄化する。②放牧家畜などの糞を分解することによって、ハエ目昆虫の発生を抑制する。③野生動物（昆虫なども含めて）の排出物を分解する。④野生動物の遺体処理に関与する。上記の①と②のような仕事をするものは、農事試験場や畜産試験場で考えているフン虫であるといえるが、ドイツのことわざにある「森の下に森」を考えるとときには、森の中の落葉の下で作業をしているフン虫の存在も忘れてはならない。そして、③の仕事も重要なことであり、④はコブスジコガネその他の仕事である。いわゆるフン虫以外にも糞や遺体処理に携わっている生き物はいくらかもあるだろうが、一般にフン虫といえば、食糞性コガネムシ類をさしている場合がほとんどである。このようにフン虫は、むかしから自然のなかの掃除屋さんとして有名である（塚本 1994：24-25）。これは、信頼のおける論述であると考えられる。ことに、バーサンバンプについて考察するうえで、①と②は重要なポイントになる。それに、③そして④と、どうかかわってみるかについて、フィールド・ワークを軸に実

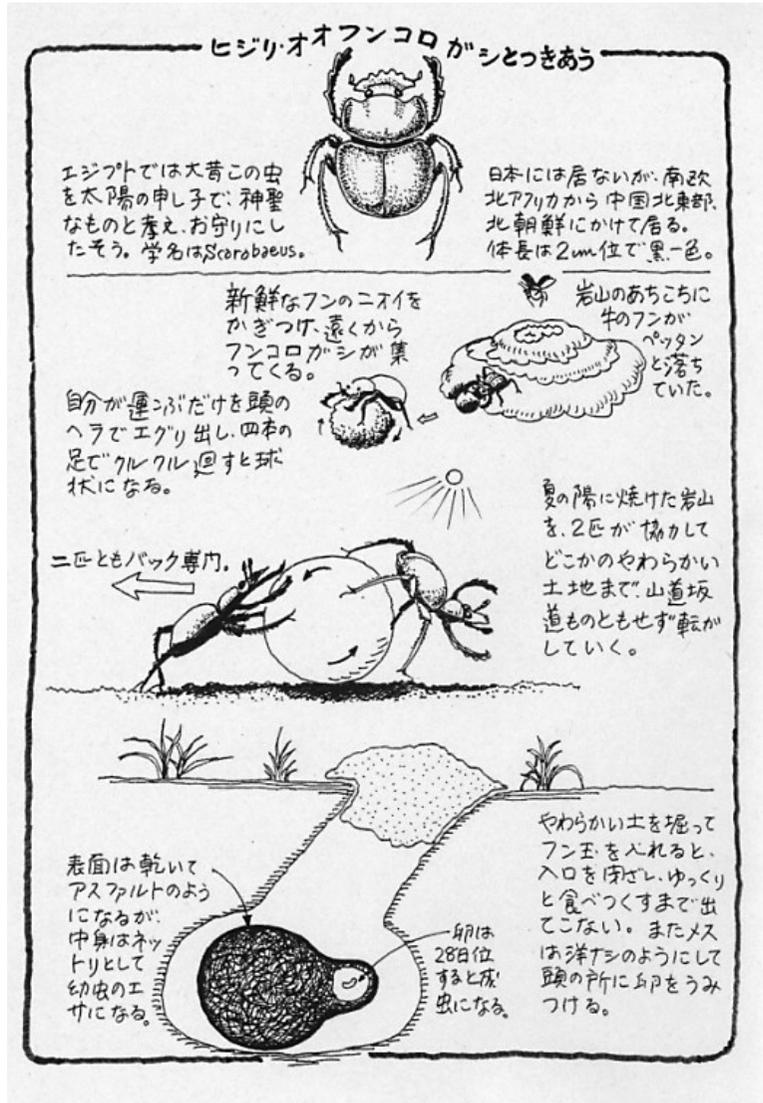


図2 タマオシコガネがはたらいているところの漫画 (小宮清 1982 『満州走馬燈』)

証する必要がある。モンゴルのタイガ樹林地帯に、森のなかの落葉の下でバーサンバンプに似ているものが働いているからである。

#### 4 糞転がしをめぐる生態循環

草原に行くと、牧野に何者かが地中から運び出した細かい土粒がこんもりと盛り上がっていることに気づく。それは、バーサンバンプが糞球を埋めるために掘り出した土粒

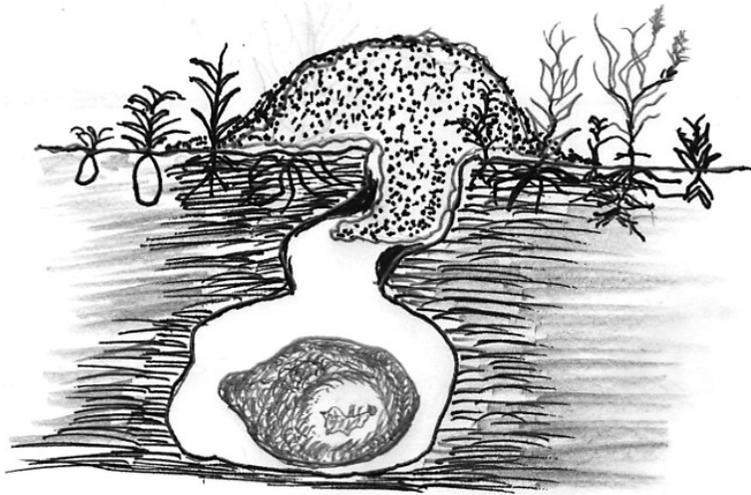


図3 バーサンバンプが糞球を埋めるために掘り出した土粒でできた小さな土丘の断面

できた小さな土丘である。その周りにバーサンバンプが糞を転がしたような跡が見られる。草原で、このような、小さな堆い所をよく見かける（図3参照）。そこから、土壤動物たちによる土壤改良への貢献について考えることができる。バーサンバンプにかぎらず、種々の糞虫やアリたちが昼夜兼行で働いて、地上の掃除に励み、排泄物など汚いものを除去している。じつは、土壤動物は非常に多い。一生を土中で過ごすもの、その生活の一部を土中で過すもの、時折り土中に侵入するもの、土中に巣を作るものなど数えきれないくらいであるという（安松 1965：44）。アリが土中に営巣し、食料を搬入することが、土壤にどんな影響をするかということについて、安松の研究によれば、まず、機械的な影響で、深い所の土層が大量に持ち出されること、その巣の孔道が四方八方に拡がって通じていることは、土壤中の通風をよくすること、それによって土壤中の湿気を比較的均等に分布させることなどが挙げられる。つぎに、化学的な影響で、深い層にあった土粒が表面に持ち出されて風化が促進されること、食料として多量の有機質が土中に運び込まれ、土壤の肥沃度を増加することなどが数えられ、とくに、土壤の肥沃度を保つことに役立つというのは、永久の牧草地または草地として使うような土地において意義が深い。つまり、耕地であれば、いつも肥料を施すのであるが、それらの牧草地や草地では、とくに肥料を与えないからであるという（安松 1965：44-45）。たしかに、土着の知識からみても、バーサンバンプなどの昆虫類生物によって排泄物が分解され、草の生長を助けるのであり、また、これらの土壤動物は、草の種をまきつけるという牧草の栽培にも協力している立場にある。草の種は、四方八方に拡がっている巣の孔道によって土中にまきつけられる。雨の少ない、乾燥が激しい草原では地面が硬いため、植物の種が土中へ入りにくい。そのため、草の種が糞虫などの巣穴を通して土中につく



図4 地下につくられた昆虫の巣の断面

ものであり、また糞虫が糞とともに草の種を土中に運び込んでくれるものだと、遊牧民が考えている（図4参照）。

ダーウィンは『ミミズの作用による土壌の生成』（1881）という名著のなかで「われらが広大な土壌に被われた原野を見る時に、忘れてはならないことは、その美しさの主な要素である平坦な地形は、主としてミミズの作用によって、一切の凸凹が次第にならされたのに因るものである。このような原野の表面を被う土壌は、すべて数年内にミミズの体を通じた、または通過するものであることを考えると、まことに驚嘆の他はない。鋤は人類の発明品の中最も古く、また重要なものの一つであるが、人類の生れないずっと以前に、この土地がミミズによって絶えず耕されつつあるのである。」と述べ、ミミズのようなすばらしい下等動物が、よく調べてみると、予想外に大きな仕事をしていることをたたえている（安松 1965：43-44）。そうして、ミミズについて評価するならば、バーサンバンプのような昆虫もまた「草原の貯水池」として土壌改良や牧野保全に大いに役立っていることを見逃してはならない。雨が降ると、バーサンバンプの巣がすべて小型の「ダム」になって活用される。バーサンバンプの巣穴は、深さ10cm、半径0.1cm、容量約0.00003立方メートル。巣穴の3分の1が貯水すると換算すれば、1巣穴で年に約0.00001立方メートル水を貯蔵することになる。この数字は、決して小さくない。1万巣穴に、1立方メートルの雨水が貯蔵できる。もし、草原に一定の単位の面積に1千万匹バーサンバンプが一匹一巣を作るとすれば、年に1000立方メートルの雨水を貯蔵できる。じつは、過去のモンゴル草原では、その一定の単位のバーサンバンプの数は、1千万匹にとどまらない。しかも、一匹が一巣だけでなく、何ヶ所も巣を作っていくわけである。こうして見ると、「1000立方メートルの水」という概念は、モンゴルの乾燥地帯にとってはいかに大切であろう（特古斯巴雅爾 2011：5）。

よそから来た人は、糞転がしを見て、汚い物によく集まっている昆虫と思うが、一方、地上には、いろいろな動物の死体や排泄物が散乱しているのを見かけるだろう。しかし、いつの間にか、地上がきれいに清浄されてしまう。これは、バーサンバンプのような昆虫たちが、それらの汚物をその場で食べたり、地下へ運び込んだりしているからである。

1980年頃に、オーストラリア政府は外国から糞転がしを輸入して牧場の浄化を進めた。

その時、内モンゴルからバーサンバンプが空輸されてオーストラリアに到着したという(特古斯巴雅爾 2011: 6)。オーストラリアでは、カンガルーのような有袋類の糞を食べる虫は、西ヨーロッパからやってきた牛馬羊の糞をほとんど食べてくれないので、1年に百万ヘクタールの土地に被害をもたらし、牧畜は増産できないため、当該政府は外国から糞虫を輸入することを考えた。そこで、糞虫輸入作戦は10年間続けられて、成功をおさめた(山崎, 海野 1988: 21)。

たしかに、何百頭、何千頭と放牧している牧野で、牛馬や羊の排泄する糞は膨大な量に達し、それを素早く清掃しなければ、広い範囲にきわめて大きな災害をもたらす、ハエが群生し、大切な牧草が枯れて、肉も乳も増産できなくなってしまうのである。それは、畜糞が分解しないため、牧草生産上に大変な被害となるわけである。ここに、野沢延行の研究を紹介したいと思う。獣医学者の野沢が書いたモンゴルの生物学に関連する業績には、興味深い内容がある。それは、実際にその生態を観察してからうまれたものである。モンゴルの草原における食物連鎖問題について、つぎのように書いている。「枯れた草が何年も残らずに次々と分解されていくのは、土の中で生活する土壤動物やバクテリアなどの活躍によるものだ。土壤動物とは土の中にいるミミズや昆虫類などの生物で、腐った植物や動物を食べて生きている。つまり土壤動物は遺体の分解者であり、いわゆる「草原の掃除屋」と呼ばれる仲間たちのことだ。土壤動物のうち、大型分解者であるミミズや小型分解者である線虫やトビムシはいたるところにいるし、ハネカクシやコガネムシの仲間は糞の回りに好んで集まり生息している。食べて排泄することで分解し、排泄されたものは無機化されやすい性質になる。さらにバクテリア、カビなどの微生物によって無機化され、土壌に還元されていくのである。無機化されたものは植物の肥料となり、吸収されて植物の生長を助ける。草の生長を助け、清掃の役割りをしてくれているのがこの「草原の掃除屋」と呼ぶべき生物たちなのだ。」(野沢 1991: 161-162)。

家畜が草を食べて排泄すると、糞転がしがそれを草の根のところに運びこみ、巣穴に埋める。そして、糞が土中に分解し肥料になる。また、肥料が草の根に吸収されて牧草になる。このように「家畜→畜糞→糞虫→肥料→牧草→家畜→」の生態循環がくりかえされている。こういう生態系の認識は、遊牧民にとって遺伝的に領略されるものともいえる。遊牧民は、ある動物や植物のあり方を、いつも他の生き物と関連させて考える。バーサンバンプについても、さきにのべたとおり、この虫が牧草の種を土中に散らし埋めるような重要な役割を果たしているという一般には知られていない生態まで把握している。

## 5 おわりに

梅棹は、「モンゴル草原の生態学的研究について—主として日本人の業績に対する批

判的総説」という論説のなかで「モンゴルの研究においては、草原の生態学的研究は、すべての基礎であるといってよい。その住民が牧畜民であり、その生活は家畜、ひいては草原に依存している以上、草原の生態学的研究のもたらす成果は、自然科学の領域ばかりか、人文科学・社会科学の諸分野にまでも、影響のおよぶところがはなはだおおきい。」(梅棹 1991: 98-99)と述べている。モンゴルにおける梅棹の研究は、主としてそこに住むモンゴル牧畜民の牧畜生活に関するものであったが、牧畜の基礎は牧野にあるとしてモンゴル草原の生態学的構造についても大きな関心をもっていたことが、戦後に公にした論説からもうかがえるのである。

じつは、それまでの研究からみれば、後藤、米内山、西島の研究にすでにモンゴル草原の生態学的視点が試みられ、生態的さまざまな問題を取り組もうとする姿勢が強まっていたにちがいないと思う。個人的な感想を述べることをお許しいただけるならば、梅棹は、かれらを批判しながら、一方でその結論にはかれらの立場が踏襲されているものもあるように感じられる。しかし、いずれも、未知の土地について、人間であれ、動物であれ、植物であれ、昆虫であれ、それらに対する土着の知識を盛り込んだ検討をなさなかったのは、生態学的方法のためには残念なことであった。現地の当時の外人による「科学的」研究者がどれだけ土俗の知識を取り入れようと努力したか、という疑問はわたしに思われる。

土俗的知識とは、人々が暮らしをし続けていく長いあいだにその生活の環境に適応するために発展させきた土着の知識である。自然科学であれ、人文科学であれ、研究の根本とは、関連資料をもって、知らずにいた自然現象や社会的事象などを論理的に実証することである。そこに、特定の分野の専門知識はもとより、土着の知識の習得や活用も求められる。伝統的な生態学的知識と科学的な生態学的知識という概念を使った議論の深まりから、土着の知識が環境保全や地域開発において重要な役割を果たすという認識が広まっていることには意義がある(小泉 2014: 621)。この点から見れば、草原の生態学研究においては、「科学的な」知識だけでは扱うことが困難な場合が多く、土着の知識と自然科学を対比的で実用性に応じることを実践することにほかならない。

それにしても、内モンゴルにおいては、梅棹の野外調査がなされていた時代と比べれば、生態的バランスが崩れ、バーサンバンプは本稿の冒頭に述べたように著しく減ってしまったようだ。第二次世界大戦後のせまりくる生態破壊の手から自然と動物を書きしるしておいてくれた梅棹のフィールド・ノート、その研究方法とともに、今ようやくわれわれに届き始めたのだ、という気がする。

## 参考文献

(日本語)

梅棹忠夫

1990 『梅棹忠夫著作集』第2巻(モンゴル研究), 中央公論社, 東京。

1991 『梅棹忠夫著作集』第3巻(生態学研究), 中央公論社, 東京。

小泉 都

2014 「土着の知識(TEKとSEK)」『世界民族百科事典』, 国立民族学博物館編, 丸善出版, 東京。

後藤十三雄

1942 『蒙古の遊牧社会』, 生活社, 東京。

塚本珪一

1994 『日本糞虫記—フン虫からみた列島の自然』, 青土社, 東京。

西島捷三

1940 「蒙古草原」『農業と経済』第7巻第1号, 農業と経済社, 東京。

野沢延行

1991 『大草原の生活誌—モンゴルの馬と遊牧民』, 原書房, 東京。

安松京三

1965 『昆虫物語』, 新思潮社, 東京。

山崎俊一, 海野和男

1988 『ファール昆虫記の旅』, 日本放送出版協会, 東京。

山崎武雄

1943 『呼倫貝爾地方牧野植生調査報告』, 南満州鉄道株式会社調査部, 新京。

米内山庸夫

1942 『蒙古草原』, 改造社, 東京。

1943 『蒙古及蒙古人』, 目黒書店, 東京。

(中国語)

特古斯巴雅爾

2011 「班布在蒙古高原自然環境和牧業經濟形態下的生態學意義—關於蜣螂的民族學研究之一」  
『原生態民族文化研究』第3巻第4期, 貴州。